
シユウ

TAKA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シンユウ

【Nコード】

N07550

【作者名】

TAKA

【あらすじ】

「死の動画事件」主人公中原カナの親友佐藤つかさはこの事件に巻き込まれた・・・！

親友を助けようとするカナの心から物語は始まる・・・！

(前書き)

この物語はトモダチの続編です。先にトモダチを読んでないと分からない所もややあります。

私の名前は中原力ナ。

私の友達、佐藤つかさはある事件に巻き込まれた。

「死の動画事件」

知らないメアドからメールが来てそのメールに添付されてる動画を見ると行方不明になる。

という都市伝説に近い事件だった。

私はその事件のうわさを親友に教えた。

しかし、そのメールに対してつかさが返信してきたメールの内容は意味不明だった。

「あの動画なに？」

まるで今その動画を見ているようなメールは私の心に引つかかった。月日は経ち、警察は「家出」という形で済ませ、捜査を切り上げた。しかし、私はどうも腑に落ちなかった。

私にはどう考えても、つかさが家出をするなんて考えられなかった。いやあるはずがなかった。

つかさには好きな男子がいた。

事件当日の帰り道に「私、明日告白する」と言っていた。

多少の緊張はあったが自分の気持ちを伝えられる・・・と楽しみにしていた。

明日を楽しみに待っていた・・・。

・・・家出？そんなわけが無い！私は諦めない。トモダチを・・・いや、

「シンユウ」を助けることを・・・。

私は・・・諦めない・・・!!。

私がシンユウを助ける意思を固めてから一ヶ月がたった。
正直、私はいきずまっていた……。
つかさの部屋からは何も見つからず何一つ進展が無い。

「もう、駄目なのかな……。」「
つい弱音をはいてしまう……。」「
いや！駄目じゃない！自分で自分に言い聞かせた。

パシ！部屋に響く音とともに私は頬を叩いて気合を入れ直した。
まだ何かある何かあるはず……！！
とりあえず事件を整理してみる事にした。

2014年4月3日佐藤つかさが失踪……。
誘拐の線も疑ったがマンシヨンの監視カメラに彼女の姿がなく、さらには家を出た痕跡さえない。

ここで捜査がいきずまり家出と断定した。
捜査報告ではこのようにかかれていたがそんなはずがない。何かトリックがあるはずなんだ……。

たしか押収物は特になしって記入してあった……。
……。？特になし？おかしくないか？

都市伝説くらいの見方しかされてないが死の動画事件はあそこまで有名になった話だ……。

携帯を調べないはずがない……。いや……。携帯が無かった？
夜中までこの意味を考えていたが結局分からなかった……。

今日は徹夜すると決めていた私もさすがに睡魔に襲われた……。
……。その時、一階から大きな物音がした……！！
とてもスルー出来る音では無く、不気味に思った私は護身用のスタンガンを持って一階に下りた。

1階に下りた私が見た光景は信じられないものだった……。
そこには制服の姿でこっちを向いてるつかさがいた……。！！
不気味な表情をしたつかさは微笑しながら言った。

「あなたもこっちにおいでよ……」
……！勢いよく起き上がって頭を打ってしまった……。
つい寝てしまっていたらしい……。うえ……。机にヨダレがついてる……。

一人でヨダレを見て赤くなっている時あることに気がついた……。

「これ……。つかさの携帯……。？」

さっきのは夢じゃなかったのか……？

さっきの夢はまるで私もあの世に連れて行くみたい……。。

いや、きつと何かこの携帯に秘密があつてそれを私に解いてもらいたかつたに違いない……。！！

シンユウの携帯を見るのは気が引けたがそんな事を言ってる場合ではないし私はメール受信箱を見た。

「あの動画に……。？」

ついにこの言葉の意味が分かるときがやってきた……。！
まっつてつかさ……。すぐに助けてあげる……！

私がメールを確認すると一通知らないメアドのメールがあった。

kayamaeikaxxx……？

栢山英香……。？たしか、1ヶ月前に自殺したつていう……。。

あれ……。？彼女が自殺したのは2014年3月21日のはず……。
なんで4月3日にメールが？

いやな予感がしたが私は思い切つてメールを開いた。

そこには動画が添付されていた……。

「これが……。死の動画……。？」

私はぜんぜん死の動画のうわさは信じてなかったが正直ビビっていた……。

だがさすがに事件当日に自殺したはずの人間からメールが来ているのを見ると不気味になる……。

これを見なきゃ真相はあばけない……。あばけない……。と言いついて聞かせて動画を再生した……。！！

そこには栢山英香にひどい事をする動画だった……。
しまいには死ねといわれて動画は終わった……。

「なんてひどい……。」

私は泣いていた……。

その時どこからか声が聞こえてきた。

楽しいよ？楽しいよ？と……。

「何が？何が楽しいの……？」

私はどこに居るのかも分からない誰かに話しかけた……。

あの動画を見た後だからだろうかこの声は栢山さんのものだと思う
た……。

そう考えるとこの声に怖がるのは失礼だと思い勇気を振り絞っても
う一度聞いた。

「栢山さん……？何が楽しいの……？」

またどこからか声が聞こえてくる……。

トモダチと一緒にいるのは楽しいよ？楽しいよ？

あなたもおいで私と遊ぼう？話そう？何して遊ぶ？何を話す？

なんだか正気の間人ではない印象をつけた……。

「ちよつと……なにがなんだか……。」

私の言葉を見無視して声はつづく……。

こつちにおいで……こつちにおいでよ……。

こつちに来てよ……！！

その時急に声が大きくなった……！！

「こつちに来て！！！」

私の目は見えない誰かにふさがれた……。

視野が黒く染められた……。

目が覚めた……たしか栢山さんの声が聞こえて……それから……？

「よく来たね？」

混乱していた私に誰かが話しかけてきた。

「栢山……さ……ん？」

栢山さんは微笑みながら言った……。

「そうよ？いらつしゃい私の世界へ……」

微笑みが不気味に変わりつづけた……

「いらつしゃい……死の世界へ……」

「え……？死の……世界……？」

私は状況が全く理解できなかった……。

栢山さんは楽しそうに微笑みながらいった。

「そう……ここは死の世界……でも安心して……ここは何

も怖くない……何も苦しくない……」

さらに栢山さんは続けた。

「何も苦しくないんだよ？だって、ほら……あなたのシンユウだ

って……そこに……」

栢山さんが指をさす方向を向く時間が異常に長く感じた……。

振り向くまでの数秒間……さまざまなのが頭をよぎった……。

死の世界……？そんなのは信じられないけどそこにつかさが居る

なら……それでいい……。

なにも考える必要はない……ただ笑った顔のつかさがもう一度見

られるなら……

それでいい……

私は栢山さんが指さす方向をゆっくりと……かみしめながら視線を上げて見た。

「……そこには確かにつかさが立っていた。

「つかさ!」

笑顔で私はつかさに歩み寄っていった。

「……つか……さ……?」

いや……そこにいるのは私が探していたつかさではなかった……。

……一片の笑顔もみせない冷たいつかさしか……

そこには居なかった……。

「つかさ……?何があったの……?」

つかさは無表情で口を小さく開き、言った。

「私は栢山さんと一緒にいただけだよ?」

久しぶりのシンユウの再会をここまで冷徹になっけいられるものなのか……?

栢山さんは後ろで黙って立っている。

私は小声でつかさに耳打ちした。

「つかさ……ここを出よう……?」

無表情だったつかさがその言葉を聞いた瞬間憤怒の表情へ変わった。

「カナ……あなたはあの動画みたでしょ!?それでもなお栢山さんを一人にしようというの!」

私はシンユウの怒りを目の前にして少しためらったが言い返した。

「私もあれはかわいそうだったと思うよ……でも!あそこにい

るのは本当に栢山さん!？」

さらに私はどんどん感情をこめていった。

「あなたをここに閉じ込めてるだけじゃない!!一人がさびしい? 私はどうなるのよ!？」

私はなにをいつているんだろう・・・何も考えず・・・叫んだ。
「私はつかさが居ない間ずっとさびしかった!側にいてほしかった!私も一人ぼっちだった!!」

私はつかさの顔を見れなかった・・・つかさを救う・・・そんなことを言っていたがこれが私の本心だったんだ・・・

ただ・・・ただ寂しかった・・・
ただ、それだけだった・・・

全ての思いをぶちまけたわたしは恐る恐るつかさの顔を見上げた・・・

「カナ・・・ごめん・・・私・・・」

つかさの大きな瞳からは涙がこぼれていた・・・

ああ・・・良かった・・・これで元の生活に戻る・・・

これで・・・

つかさが口を開いた。

「でも・・・私は帰れない。」

正直耳を疑った。自分の思いを分かってくれたはずなのに・・・

・なにがしたわらなかった・・・?

私のなにがいけなかった・・・!?

いや・・・私の思いはちゃんとつかさに伝わった・・・伝わった上でそれを拒否した・・・のか。

もう何故だか小さな声しか出せなかった。

「・・・なんで？」

つかさはじつとなにもない下をみつめながら言った。

「栢山さんを・・・やっぱり・・・ほうつておけない・・・。」

栢山・・・栢山・・・栢山栢山栢山！！！！

この女のせいで私はどれだけ苦しめられればいいの！？

「私はどれだけ栢山さんに迷惑をかけられればいいの！！？」

・・・あたりに重い空気が走る・・・。

つい口にしてしまったらしい・・・。

ヤバイ・・・栢山さんに聞かれた・・・！！

栢山さんを見ることはできなかつた・・・でも・・・彼女の心境は

容易に想像できた。

「迷惑・・・？私が・・・？あなたも私をいじめるの・・・？」

栢山さんの小言が聞こえて来る・・・。

「まって・・・ちがうの栢山さん・・・！！！！」

ドオオン！！自分の前に大きな岩のようなものが落ちてきた・・・

！！

「空間が・・・崩れてる・・・？」

どうやらこの空間は栢山さんの心境で変化するらしい・・・。

そういえば私の世界・・・とかいつてた・・・！！

まずい・・・！！このままじゃ空間が崩れて戻れなくなる・・・！！

戸惑ってるつかさに必死に呼びかけた！！

「つかさ！！あれがあなたの言う栢山さん！？」

つかさはゆっくりと息をのんで栢山さんを見ていた・・・。

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す・・・！！」

ただそれだけを繰り返し栢山さんは空間を破壊している！！

私はわかつていた・・・この空間が壊れる前につかさを説得して出ないと・・・。

永遠にこの空間に閉じ込められる・・・!!

「つかさ!!あなたが栢山さんに哀しい思いをさせたくないなら、これ以上栢山さんを汚さないことじゃないの!?!」

「あんな醜い姿!!栢山さんは見て欲しくないじゃないの!?!」

つかさは落ちてくる空間の破片に見向きもせず考えていた。

しばらく考えたあとつかさは重い口を開いた・・・!!

「あんなの・・・栢山さんじゃない・・・!!」

私は空間が壊れている焦りを隠し、微笑みながらつかさの手を握った・・・!!

「行くよ!!つかさ・・・!!もう私達は一人になんてならないんだから!!」

「うん!!ありがと・・・カナ。」

私は目的もなくなつた・・・ただ・・・栢山さんから逃げるように走つた・・・。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

もう何分走つただろう?栢山さんはどこにも見当たらないけど・・・。

つかさも随分疲れたらしい顔が真っ赤になつて・・・。

・・・私は答えが返ってくるはずのない質問を投げかけた。

「どこに出口があるの・・・?」

つかさはきよとんとして・・・。

空間が壊れていく・・・もう時間が無い・・・もう・・・駄目なの!?!?

しばらくして後ろから醜い姿になつた栢山さんが追いついてきた・・・!!

その時声が聞こえた・・・。

「大丈夫です・・・。」

後ろから誰かにはなしかけられた……。

「誰……？」

私は振り向いて尋ねた……。

不思議な感じだった……。空間が崩れていく破片がいままで忌々しかったのに……。

ホントにきれいな……。破片に見えるほど……。

そこにはホントにきれいな……。栢山さんがいた……。

「栢山さ……？」

私達は声をそろえて硬直した……。

きれいなあなたたかい栢山さんはやさしい口調で言った。

「これ以上あなたたちを苦しめるわけにはいきませんね……。」「無理に作ったようにも見える笑顔が段々白くなっていった……。

いや私の視界が白くなっていつている……。

栢山さんは私達を助けてくれるの……？

朦朧とする意識のなか確かに聞こえた……。

栢山さんの声が……。

「ありがとう……。」

その言葉がなにを意味するのか分からないけど……。なぜか何とも
いえない開放感が私をつつんだ……。

罪を重ねなくてすんだから？

醜い姿を見られたくないという本心に気づいたから……？

ありがとう・・・その言葉の意味を考えてるうちに私の意識は遠く・・・遠くなっていった・・・。

1ヶ月後・・・

うみねこのなくこの海辺に栢山さんの墓はある・・・。
私とつかさはここに倒れているのを発見されたい・・・。
もっとも・・・意識がもどったのは病院だったけど・・・。
私がいたところと発見された場所・・・一日で移動できる距離ではなく・・・また都市伝説ができてしまっていた・・・。
もう勘弁してほしいがいろんなことをきかれて今は毎日バタバタしている・・・。
でも私とつかさは今もこうして生きてる・・・。
これも栢山さんのおかげ・・・だったりする・・・。
結局、栢山さんの「ありがとう」の意味も突然現れたもう一人の栢山さんのことも良く分からなかった・・・。
ただ・・・私達の絆がああ奇跡を起こせたんだと思う・・・。
私とつかさと栢山さんの絆が・・・。

つかさは栢山さんの墓に線香を置きながら小さく口を開けた・・・。
「私がかすにあの夢をみせて携帯を渡したのって、ホントはあの空

間から救って欲しかったからなのかもしれない……。」「
なぜだか顔が赤くなってしまった……。

「私は別に……。」

私は何も出来なかった……。よく考えると、あの空間からつかさを
連れ出してくれたのは私ではなく栢山さんだったのかもしれない……。

私は白い花束を栢山さんの墓に置いて咳いた……。

「ありがとう」

F i n

(後書き)

読んでくださりありがとうございました。
次作にご期待ください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0755o/>

シンユウ

2010年10月11日10時53分発行